The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	TA (Teaching Assistant) の声　サイバーメディアフォーラム no.14　CALLシステム
Author(s)	
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2013, 14, p. 46-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70359
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

CALL 教室授業の TA として学べること

中野 遼子（言語文化研究科 言語文化専攻）

1. はじめに

私は 2010 年から 3 年間半、様々な先生方の CALL 教室授業の TA をやらせていただいた。ここでは、私が CALL 教室授業の TA として学んだこと・気づいたことについて述べたいと思う。

2. CALL 教室授業の TA の利点

まず、大阪大学の CALL 教室で TA を担当することの利点について述べる。それは、最新機器を常に使用できるということである。大阪大学の CALL 教室は年に 1 度、機器や設備が新しくなる。毎年 4 月の CALL 教室講習会に参加しなければ、使用方法が全く分からなくなってしまうほどである。コンピューターだけでなく、最新のセンターモニターや音声の出力、DVD やコンポなどの使用方法も知ることができる。大阪大学ほど最新設備を整備しているところはそれほど多くない。そのため、公共施設や他大学でコンピューターを使用する場合でも、困難を感じない。

3. 先生方から教わること

CALL 教室は、普通の教室では提供できない外国語教育を行うことができる。そして、どの先生方も CALL 教室の利点を生かし、様々な工夫を凝らしながら、授業を行っている。ここでは、先生方の授業を見て学んだ CALL 教室における外国語の授業方法について記す。

①授業初日から 受講学生の名前を呼ぶ

CALL 教室には、CaLabo というソフトが入っており、学生がログインするとどこに誰が座っているのか分かるようになっている。普通教室では、座席指定をしなければ、学生の顔と名前を一致させることは難しい。しかし、CALL 教室では座席を自由にしても、授業初日から名前を呼んだり、覚えたりすることができる。

② 自作の練習問題を何回もやらせる

Web4U や CLE を使って、自作の問題を学生にやらせることができる。また、学生は自宅で何回も問題を解くことができ、簡単に復習できる。

③ 生の教材を提示する

CALL 教室では、教科書だけではなく、例えば英語ニュースや TED の動画などを学生に提示して、生の外国語を読ませたり聞かせたりすることができる。

④ 学生の課題を Web 上で公開する

学生に課題として、日本の事をドイツ語で紹介させたり、学生がドイツ語で演じたスキットを iPad に録画させたりして、それらを Web 上に公開することもできる。学生は達成感を感じられ、また授業が終わっても自分の作品を何度も見ることができる。

⑤ 授業中に英文を添削する

CaLabo を使うと、教師機から学生の画面を見て、さらにヘッドセットを使用して 1 人 1 人と話すことができる。それを利用して、英作文を書かせる際、教師機から各学生の英文をチェックし、間違いなどがあれば学生に話しかけて訂正させることもできる。

4. 学生から学ぶこと

CALL 教室における TA は先生方からだけではなく、学生から学ぶことも多い。大阪大学では、コンピューターを得意とする学生対象の授業の TA を担当する機会が、しばしばある。次に、学生から学んだこと 3 つを以下に述べる。

① Word の使い方

2011 年ごろ、私はまだ Word2003 を使用していた。あるドイツ語の授業で Word に日本語訳を書いて先生に提出するという課題があり、行数が指定されていた。そのため、1 人の学生から「ページ設定のやり方を教えてほしい」と質問があった。しかし、新しい Word で行数を指定する方法が分からず、私が別の受講学生に聞いて教えてもらった。TA として少

し恥ずかしく感じたが、この時受講学生から教えてもらうことも大事だと思った。

②検索エンジンの使い方

シンガポール、カタール、イギリスなど様々な国の英語ニュースを読むという授業がある。学生は、その日に読む記事を検索しなければいけない。先生は、Google の検索ページを開いてからニュースを検索する。しかし学生はわざわざ Google のページを開かずに、右上にあるツールバーからニュースを探す。すると、多くの学生が「目的の記事が見つけられない」と質問をしてくる。その理由は、右上のツールバーは「日本語のページを検索」に設定されているので、例えば CNN を検索すると日本語版 CNN しか表示されないようになっている。その度に、学生に「Google のホームページに行って検索し直してください」と伝えていた。ある時、1 人の学生が右上のツールバーから検索していたので、また質問が来ると思い、様子を見ていたら、その学生は「日本語のページを検索」をクリックして、「すべての言語」を選択した。すると英語のページも表示され、目的の記事を見つけていた。「こんなやり方があるのか」と驚いた。それ以来、「先生が示している記事が見つからない」という受講生に、その簡単な方法を教えるようにしている。

③CALL 教室の利用方法について

同じ授業の TA をしていた院生からも、CALL 教室を利用した外国語教育のヒントをもらうことがある。2012 年に後輩の O 君とドイツ語の授業の TA を担当した。そのドイツ語授業は、4 人 1 組のグループを作り、ドイツ語テキストの日本語訳を各グループで相談しながら Word に書いて先生に提出するという授業であった。最初先生は日本語訳を書いた Word ファイルをメールで提出させることを考えていたが、O 君は CaLabo を使って Word ファイルを回収することを提案した。しかし学期の途中で、共通教育棟の CALL 教室の CaLabo が起動しなくなった。そこで、O 君は次に、この授業用にホームページを作り、そこから学生が課題を提出できるようにした。その方法を採用してすぐに、O 君が教育実習で 3 週間欠勤することになった。ホームページによるファイルの受け取り方がよく分からず、私は心配していた。その時 O 君から、インターネット電話を使って私がクラスの状況を伝え、O 君がホームページを遠隔操作することを提案してくれた。O 君がいない授業当日、実家にいる O 君がホームページを操作して、広島から授業の TA として参加した。私がヘッドフォンをつけながら O 君と話し、先生が「今広島にいる O 君と電話が繋がっています。」というと学生も驚いていた。そして、O 君の遠隔操作のおかげで全グループ無事に課題を提出できた。授業後、O 君と電話をしながら、試しに音声を出力してみた。すると、CALL 教室いっぱいに O 君の声が広がった。先生と院生の聴講生と私は一斉に拍手をした。院生の方は「こんなことができるようになったんですね！」と驚いていた。先生は「O 君の声を聴かせてあげたら学生たちは喜んだやろうなぁ。」とおっしゃった。O 君がいろいろ試したことによって、CALL 教室のさまざまな可能性を知ることができた。

5. おわりに

以上のように、CALL 教室の TA を担当させていただき、先生方の授業方法から、学生たちによるコンピューターの使用方法まで、多くのことを学ぶことができた。TA として得た知識は、非常勤講師などで外国語の授業をする際に非常に役立っている。

コンピューターなどの機器類は常に新しくなっているため、CALL 教室の TA は毎年担当できることが望ましいと感じる。毎年 CALL 教室の TA を担当させていただき、たくさんのことを学ぶ機会に恵まれたことにとても感謝している。

「異文化理解を目指した英語プレゼンテーションの理論と実践」に関わって

西村 玲和　（言語文化研究科 言語文化専攻）

１．はじめに

2012 年度の前期に引き続き、後期も火曜１限で竹蓋順子先生の「言語技術研究」の授業をお手伝いさせてもらった。これは前期同様、男女共同参画推進オフィスの実施している研究支援員制度の助成を受けて実現されている。授業時間に限らず、準備の方でも関わりを持たせてもらっており、授業の裏側も含めた部分を密に観察することが出来た。そこで、今回は主に後期の授業について、参与観察にあたるような手記を書きたいと思う。

「異文化理解を目指した英語プレゼンテーションの理論と実践」という授業タイトルにある、後半部のプレゼンテーション技術の養成については、主に前期で行い、後期でも時間を見つけて引き続き行われている。前半部の「異文化理解を目指す」という部分が後期の目玉であり、ウィスコンシン大学ミルウォーキー校との交流授業を通してその実現が図られている。最初に、前期でも行った前半部「英語プレゼンテーションの理論と実践」について記述し、その後に「異文化理解を目指す」授業の側面に光を当て、最後にまとめとしたい。

２．英語プレゼンテーションの理論と実践

まずは、プレゼンテーションの構成や理論に加えて、良いプレゼンテーションの見本を見ることを通してコツなども習得が目指された。それらを踏まえて、今度は実践として、受講生は、自分の異文化体験や、ついて良い嘘はあるのかないのか、など様々なトピックについて多くの発表機会を持った。また、AFP WAA サービスを使用して、AFP 通信が教育機関に提供している動画等を使用したプレゼンテーションを前期に行ったということ、これら前期に行った内容については西村（2012）に詳しい。[1]

後期に追加されたトピックとしては、「私の夏休み」という題目でウォーミングアップを行ったことを除いては、ほぼ全てが映画を視聴して、そこから感じたことについて説得的にプレゼンテーションを行うというものであった。１月末の最後の授業で、自分の好きな映画を一つ選び、その映画を聴衆が見たくなるようなプレゼンテーションを行ったのだが、最後のその自由度の高いプレゼンテーションが成功するように、同じ映画を視聴して様々な切り口からプレゼンテーションを行う練習もなされていた。具体的には、黒澤明監督の『生きる』や、"Tuesdays with Morrie"、そして、"One Flew Over the Cuckoo's Nest" を視聴した。これら三作品ともが「生きる」とはどういうことなのか、というテーマに則った映画であり、その点で一貫したメッセージが授業全体のテーマとして暗示的に隠されていたとも言える。"Tuesdays with Morrie"は、モリー先生の教え子であったミッチアルボムが主人公のノンフィクションで、ジャーナリストとしての仕事に追われ大切な物を見失いかけていたミッチが、死を直前にしたモリー先生と久しぶりの対面をすることを通して、生きるとはどういうことか、その上で大切なことは、ということについて改めて考え始める、というストーリーであった。"One Flew Over the Cuckoo's Nest"は、精神病棟での人々の安定したしかし変化や意思といった人間性のない暮らしが、刑務所から逃れるために精神病のふりをして精神病棟に入ってきた、主人公のマクマーフィーの登場によって劇的に変化し、生きるとは自分たちの意志で自由に選択することだ、と言わんばかりに、自由へと繋がる反抗といえる様々な大騒動を巻き起こす物語である。この"One Flew Over the

Cuckoo's Nest"に関してのプレゼンテーションを行った際には、「自分の考えを大切にして行動すること」、「民主主義的な自由とは」、「個人の自由と全体の協調性のバランス感覚」などそれぞれ全く違ったテーマでプレゼンテーションがなされた。

３．異文化理解を目指す

後期においての授業の目玉は、ウィスコンシン大学ミルウォーキー校（以下、UWM）との交流授業にあった。Skype を通じて大阪大学と UWM の学生がビデオ通話を行うことと、facebook 上でのディスカッションなどが、様々なテーマを通じて行われた。

行われたテーマは以下の通りである。まずはウォーミングアップとしての自己紹介から始まり、次に前述の黒澤明監督の『生きる』という映画の内容について、また、マナーについて啓発する meme と呼ばれるポスターをそれぞれが作成して、その内容について文化の違いを踏まえたディスカッションが行われた。そして最後のアクティビティとして、日本の各受講生が自分の好きな料理を取り上げ、その文化的な背景を説明したり、実際に材料を調達して自分で調理している場面を撮影した動画を使用したりしながら、UWM の学生にその料理の魅力とレシピを伝えることを目標としたプレゼンテーションを行わせた。このプレゼンを視聴した UWM の学生たちは、紹介された約 10 種類の料理を学生寮のキッチンで調理し、その様子がビデオで撮影された。動画サイトである vimeo にアップロードされたこの動画は、日本の受講生も視聴し、自ら提示したレシピなどが上手く相手に伝わったか、確認することができた。

４．プレゼンテーションと異文化理解

前期のプレゼンテーションにおける授業において一貫して伝えられてきたことが、プレゼンにおいて伝える「相手」を意識すること、またその「聴衆」がプレゼンを聞いて行動を起こしたくなるように目指すべきだと言うことである。この前期が理論編であるとすれば、後期の授業はまさに実践編である。その肝は、相手の知らない異文化情報を与えながら、実際にそれについて行動を起こしてもらうというアクティビティが各々のテーマで図られていたことにある。また、Skype における通話を通して相手を動かすためにはどのようにすれば良いか、という反省が最後になされたという点で、「異文化」に属すると考えられ説得するには少し難易度が高いかもしれない「相手」に伝えるにはどうすれば良いか、フィードバックを踏まえて受講生たちは考え続けただろう。

最も受講生たちがイキイキとしていたという意味も含めて成功した事例が、日本料理にまつわるアクティビティである。この実践が成功した理由は、その内容が受講者の興味を大いにそそるものであったことに加え、「おいしい料理を作りたい／紹介したい」という日米双方のゴールがはっきりしておりプレゼン実践そのものがまさに content-based なものであったことにあると思う。料理情報をプレゼンする側の日本の学生が誤った情報を与えてしまっていたら、聞いた UWM 側がそれを料理するという実際の行動に起こした時にも何か弊害が起こってしまうとプレッシャーを感じたり、面白くないプレゼンをしてしまったら、せっかく一生懸命準備してもその情報が相手に活用されることはないという、ちょっとしたがっかり感を回避しようとするなど、動機付けの面でもうまくいった実践であったと思う。

実際にオムライスや天ぷらが出来上がっていく中で、その様子をビデオで撮影したものを見ながら、「オムライスめっちゃ美味しそう」とか、「天ぷらの衣の水分の調節をちゃんと説明するんだった」など日本の受講生たちは笑いながら様々な反応をしていた。少しの失敗を反省しつつも、大枠では「日本料理の魅力を伝えて、その作り方などの異文化情報を与え、それを実際に行動に起こしてもらう」というプレゼンテーションについて、「実際に起こした行動

としての料理が美味しかった」という最高のフィードバックが帰ってきたと言える。これは、うまくいったプレゼンテーションのその後、つまり、「聴衆のアクション」というものを垣間見る貴重な機会であったと言える。しかも聴衆の中でも伝えることが難しいはずの異文化に属する人々を相手に、その笑顔を勝ち取ったのだから、これ以上ないプレゼン成功体験を受講生たちは得たのではないだろうか。

「生きる」とは、自分の意志で行動することでもあるが、人間は一人では生きられない。そして、人間とはそれぞれ違いを抱えている、いわば本質的に人間は大なり小なりの異文化を持っていると言える。しかしその異文化と目されるものは、「みんな違ってみんな良い」のである。そう思えるためには、お互いの違いや思いを上手く伝えあう必要がある。そう、日常は小さなプレゼンテーションの連続なのかもしれない。手を取って笑顔で暮らしていく、そのためにコミュニケーション<伝えあい>をするということ、それが「生きる」ということではないのだろうか。そのようなことが伝わる授業であった。そして、これから異文化間でのやりとりが上手くいって平和へと向かう、その成功の兆しが、日米の学生たちの笑顔に見えた気がする。

参考文献

[1] 西村玲和（2012）「ICT 環境による教育イノベーション―iPad や Facebook を活用した授業を TA として見て―」『サイバーメディア・フォーラム』No.13, 大阪大学サイバーメディアセンター, pp. 67-68.

JTA を体験して

汪 南雁（言語文化研究科 博士後期課程２年）

2013 年度前期、私は英語（Reading） Ⅰ とⅢ、ドイツ語中級Ⅲ、地域言語文化研究Ⅰ（ドイツ語）の四つの授業の JTA を務めました。

四つの授業とも全学共通教育の外国語教育科目です。JTA としての主な業務は、授業中機器の操作で困った学生の補助をすることです。以下、今回の JTA に従事する上で気をつけていたことや学んだことについて述べます。

まず、JTA として気をつけていたことは主に三点です。一つ目は、コンピューターの操作はもちろん、教師用端末のスイッチパネルの操作や視聴覚機器類の操作も覚えて、必要な時に先生を補佐することです。CALL 教室を初めて使う先生方やまだ操作に慣れてない先生方もいらっしゃるので、JTA の私は少しでも先生方のお手伝いができたらと思い、CALL 講習会でいただいた資料を何度も最初から最後まで読みました。

二つ目は、学生たちの授業態度を観察することです。授業中机にうつぶせで寝ている学生や体調が悪そうな学生がいたら、まず優しく声をかけるようにしました。「大丈夫ですか」と聞いたら、学生の答えはいつも「はい、大丈夫です」でした。そして、二度と机にうつぶせになることはありませんでした。こちらが相手のことを心配したら、相手もこちらの気持ちを考えてくれて、元気がなくても元気をだそうとしてくれたからでしょう。

三つ目は、教室を巡回するときは先生及び学生たちの迷惑にならないように気をつけることです。例えば、先生の説明中は巡回しないこと、歩き方や足音がみんなの迷惑にならないようにすること、そして座るときは前に、立つときは後ろにいるように気をつけていました。

次に、今回の JTA から学んだことは主に二つあります。一つ目は、CALL システムに、「SKYMENU」や「CaLaboEX」といったソフトウェアの活用により、従来の外国語教育の授業と比べて様々な可能性が出てきたことが分かりました。例えば、パソコンで出席を取ることや、アプリケーションの一斉起動、教材の一斉配布、画面ロックなどが一瞬でできます。そして、一番印象に残ったのは、学生が作文を書いている時に、教師による「同時添削」ができることでした。これらのことは、今後の外国語教育での活用効果が、十分期待できるでしょう。

二つ目は、先生がいかに学生たちを集中させながらいい授業をするかについて勉強することができました。学生とのコミュニケーションの取り方、授業の流れ、テストの作り方など多くのことを勉強できました。これは、教師を目指す私にとって本当に宝物です。

最後に、これから JTA を始める方にアドバイスをするならば、何よりもまず、事前に、JTA として何をどのように支援すればいいかを先生に確認することです。先生や授業によって、JTA の業務内容が違ってくるので、学期の最初に業務内容について担当の先生に確認する必要があります。

以上、私の体験談でした。少しでも皆さんのお役に立てたら幸いです。